

沖繩ダルク・森新代表に聞く

薬物依存症からの回復に取り組む民間のリハビリ施設「沖繩ダルク・リハビリテーション・センター」の代表に森廣樹さん(49)が1日、就任した。かつての自分と同じ苦しみを味わい、抜け出そうともがく入寮者を手助けする。今年から薬物依存に悩む人の家族同士が語り合う家族教室も始めた。1994年に全国7番目の施設として発足してから18年。森新代表に、今後の課題や活動などを聞いた。

(聞き手―上地一姫)

田芋育て共に楽しむ 家族が語らう機会も

「ダルクとの出会いは、10代で友人に誘われるままにばちやシンナー、酒、覚せい剤に手を出した。働き始めてからはストレスがたまる。と薬物や酒、ギャンブルなどで気を紛らわせた。自分は薬とうまく付き合えると思ってた。39歳に薬物を所持し、逮捕された。仮出所の時、親や妻子が身元引受人にならなかった。本で知った茨城ダルクに自ら手紙を出し入寮

した」

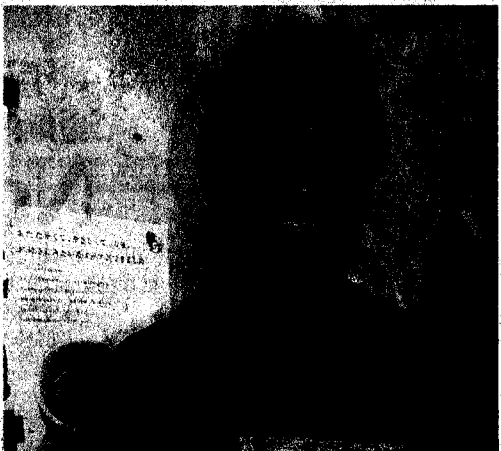
「なぜ沖繩に来たのか。茨城ダルクに入所してから約1年後、スタッフ研修として沖繩に来た。沖繩ダルクは、全国のスタッフ養成施設としての役割も担っている。これまで沖繩でプログラムを受けた30人以上が、国内外にある施設の責任者やスタッフとして働いている」

エイサーで自信

「前代表の三浦陽二さんは繰り返して回復には地域の受け入れが大事」と強調していた。地域との関わりはどうか。

「エイサーの指導は沖繩ダルクが始めた特徴的プログラム。地域の人に披露することで交流するきっかけになっている。スタッフ研修に来た自分でも練習はきつかった。しかし成し遂げることで達成感を味わえ、仲間と連帯感が生まれた。依存者は自己肯定感の低い人が多い。人に感動を与える喜びを知ること自信

地域との交流 脱薬物に力



沖繩ダルク・リハビリテーション・センターの代表に就任した森廣樹さん(左)と野崎市伊佐

退寮後の仕事探し課題

回復につながっている」

「農業利用プログラムの受け入れ地である田芋農園のスタッフが、入寮者と同じ目標で指導してくれたことも大きい。食物を育てる喜びを教え、育てた田芋がスーパとして商品化されたとき、パッケージにダルクの名前をいれてくれたこともうれしかった。協力者に感謝している」

入寮者の就職先は。

「入寮者は現在、約20人いる。過去の経験やダルクでプログラムを受けていることを打ち明けた上で、介護施設や弁当店などさまざまな場所で働いている。障がいがあったり、高齢で自分で仕事を探せない人もいる。退寮後の行き先をどうするかは今後の課題」

依存症は「病氣」

「相談は増えているか。近親者が名乗った上で相談するケースが増えている。責任を感じ、自力で立ち直らせようとする親は多いが、家族間では甘えが出る。早く回復するためにも、依存は病氣と理解して相談してほしい。私も身元引受人にならなかつた家族を当初は恨んだが、今は愛情だったと理解している。今年1月から家族が語り合い情報を共有する会を始めた。家族が経験などを話し合い情報交換している」

家族教室は、毎月第2水曜日の午後6時半から北谷町保健相談センターで行っている。問い合わせは沖繩ダルク・リハビリテーション・センター、電話098(893)8406。